



Title	音の民族誌 : モンゴル遊牧社会における人・動物・風景・霊的存在をつなぐ実践
Author(s)	薩仁図雅
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16966号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16966
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99810
Type	doctoral thesis
File Information	Sarantuya_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 薩 仁 図 雅

主査 教授 山 口 未 花 子
審査委員 副査 教授 小 田 博 志
副査 准教授 瀧 本 彩 加

学位論文題名

音の民族誌

—モンゴル遊牧社会におけるヒト・動物・風景・霊的存在をつなぐ実践—

当該研究領域における本論文の研究成果

モンゴル牧畜社会についての人類学的研究は国内外において多くの蓄積があるものの、その中心は生業や生態に着目したものが多く、また民族誌は人間中心的な視点から描かれてきた。これに対し、本論文はモンゴル草原において歌、かけ声、沈黙、風の響き、動物の鳴き声といった「音」が、人間、動物、土地、精霊という多様な存在のあいだにどのような関係を生成し、世界を立ち上げるのか、遊牧民が日常生活の中でどのように音を聴き、解釈し、諸存在との関係を形成しているのかという生活世界の音実践を丹念に描くことで、モンゴル牧畜民の民族誌的研究に新たな視点をもたらすものである。

こうした音の民族誌を分析する枠組みとして、マルチスピーシーズ人類学や音の人類学、インゴルドの環境人類学、ケア論などの議論を参照しつつ、祈りや儀礼を人間中心的な行為ではなく、人・家畜・自然環境・霊的存在が共に関わり合う共演的実践として位置づけることによって、音によっていかに世界が立ち上がり、関係が作られ、作動していくのかを示すことに成功している。特に草原の中で沈黙を基盤として音が立ち上がり、人や動物だけでなく風景や精霊などの存在を結び付ける音の働きという言語化するのが難しい現象を、薩仁図雅氏自身がモンゴル遊牧民社会で育ったというポジショナリティからくる内側の視点を生かし、詳細な事例を積み重ねるとともにその意味についても丁寧に解説することで説得的に描き出している。

また、先行研究との対話をかさねることで、例えば仔を亡くし乳を出さなくなった母ラクダに歌を歌うことでケアを行うと同時に母乳の分泌を促進し、日常の生活に戻ることを可能にするような実践を「世界を維持し続ける物質的・感情的・倫理的実践」であるケア論の観点から論じるとともに、ケアの応答性やケアによる調整といった議論を、音を通じた多種（マルチスピーシーズ）の関係形成という側面からマルチスピーシーズ人類学の議論にも接続するなど、存在論的転回以後の現代人類学理論を拡張することにも貢献している。

学位授与に関する委員会の所見

上記に述べたように、オリジナリティの高さや、薩仁図雅氏のポジショナリティを生かした詳細な民族誌としての価値、そして現代人類学への理論的貢献において審査委員会は本論文を高く評価している。特に、モンゴル地域における音に着目した研究の空白を埋めるとともに、動物や風景といった非人間的な存在との関係形成に着目してモンゴル牧畜社会をとらえ直すことを通じ、これまでの研究に新たな視座を持ち込むことに成功している点は人類学という学問分野への大き

な貢献である。

また、本論文の成果の一部は、北海道民族学会、日本モンゴル学会、日本文化人類学会、国際シンポジウム「先住民の伝統知」で発表されたほか、『北方人文研究』への査読付き論文の掲載、学術書（『〈動物をえがく〉人類学』）の一章を執筆するなど着実に公表されている。

審査委員会からは、モンゴル草原という環境がどのように思考や文化様式に影響を与えたのかという点や、音の行為主体性や他の諸感覚との関連についての踏み込んだ議論について不十分な点がみられるという指摘がなされた。これに対して、薩仁図雅氏は問題点を自覚していること、また今後の研究の中で検討し議論を深めていくという見通しを示すなど、建設的な応答がなされた。また、これらの問題は本論文の独創性や民族誌的な価値を損なうものではなく、部分的かつ今後の展開として位置付けることが可能なものであり、博士論文全体の価値を下げるものではない。

以上の審査を踏まえて、審査委員会では全員一致して、本論文の著者である薩仁図雅氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。